

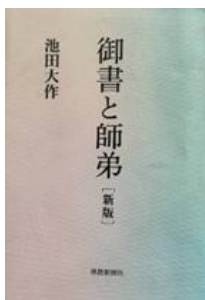
「池田大作 御書と師弟 新版」の改変問題他 2026年5月8日

創価高校・大学4期 関齊修（埼玉県所沢市在住）

（以下、赤・青字 下線等は関齊による）

4月19日、私は、地元幹部より県主事の役職を解任されました。その理由は自活様サイトに投稿し続け組織を攪乱したからとのことでした。抗弁の機会はないとのこと、また、その直後、地元幹部を集め、私の事を組織に知らせること、今後は関齊とは接触しないこと、メールは拒絶の意思を伝えること等通知され、その後、私の所属する地元組織のラインG自体が上からの指示で削除、私は村八分状態です。こんなことが対話第一の学会でされるとは、私は、その冷酷さに恐怖心を抱きます。これは人権侵害であり今の社会ではあり得ない暴挙です。池田先生のお心とは全く違います。私は、この事態は一方的でフェアでなく法的にも問題のある可能性ありと判断、ここに簡潔に抗弁を記し置きます。

私は、2023年11月発刊の「教学要綱」が底意に釈迦本仏論を潜伏し、日蓮仏法を否定していることこそが、結論、今、学会員を教学的に攪乱させていると考え、昨年1月2日よりこれまでに26本の拙文を自活サイトに掲載して頂きました。そして、地元で副会長二氏以下壮男女性部幹部に「教学要綱」の質問会を要請したところ、教学要綱についての論議は一切なく上記のように解任されました。そして、5月3日を迎える中、再度、「教学要綱」及び近刊教学書を再読、私の判断に間違いはないと確信し、最近刊で重要な「池田大作 御書と師弟 新版」も、先生の本来のご指導を大改竄し学会員さんを攪乱しているに違いないとの思いに至りました。



その後、私は親友中村誠氏の著作「**釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした異様な書物群**」2010年以前の池田名誉会長の著書との徹底比較検証」（2026年4月28日発刊）を読み、その論述中から「池田大作 御書と師弟 新版」（2024年11月18日発刊）での**改変、大改竄の実態の記述**を知り、これを皆様にお伝えしようと決意しました。中村氏の了承のもと以下に引用ご紹介します。また、他の近刊教学書の改竄についても記します。中村氏の著作には一

池田先生の書物に『御書と師弟』全三巻というものがある。この本は次の三点において極めて重要な教義書であるということがいえる。

1) 大聖人を根本仏とし、釈迦を迹仏としている。2) これまでの教義書と同様に人法一箇を説いている。3) 池田先生が公式に表舞台に出なくなった時期に発刊されている。(一巻は2010年4月2日発刊。二巻と三巻は2010年9月8日発刊、大白蓮華掲載は2008年12月から2009年12月までの一年間の連載)

御書と師弟全三巻の新版が、池田先生の死去から618日間後(約1年8ヶ月後)に発刊された。注目すべき説明項目は次のようになる。一、本書は、『御書と師弟』全3巻を合冊し、新版とした。一、編集部による注は、(=)と記した。一、引用・参考文献は巻末に収録した。池田大作. 御書と師弟 新版 (p.4). 聖教新聞社. Kindle 版.

ここにはこの新版に関する内容の変更に関する説明は何一つされていない。だが、私が注目したのは、この本の旧版の2巻, p. 31に『人法一箇』という語彙が掲載されていることである。私は確信をもって、密かにこの語彙は新版から削除されると推測し、kindle本を購入してみた。案の定、新版(当確箇所はp. 244)からひっそりと削除されているので、正直笑ってしまったのである。改変箇所は勿論これだけではない。日蓮大聖人を根本の仏とする最重要講義の箇所がゴッソリ削除されているのである。今回はそれだけではない、注目すべきは、五老僧に関する項目も削除されていることである。それらをこれからみていこう。

問題その(一) 大聖人を根本仏とする講義を全て削除

① 旧版一巻, p. 16-17 小題が「人間革命のドラマ」で本文は「実は、もう一歩深く日蓮仏法から見れば、この挑戦を起こした瞬間、生命は大変革を遂げています。一念が深く定まれば、三惑は瞬時に打ち破られるからです。だから国土も変わらないわけがないのです(中略)妙法を朗々と唱え、師の心をわが心として広宣流布の行動を勇敢に開始するのです。「いつか」ではない。「今この時」が勝負です」。しかし、新版 p. 13ではこの箇所が完全削除

私見(中村氏):なぜこの箇所が削除されたのか。そのヒントはこの文章の前にある。「大事な点は、釈尊が、間を空けずに、二度、三度と、連続して国土を変え続けたことにあります。第二波、第三波とうねりを起こし続けてこそ、偉大な変革は成し遂げられる」(旧版一巻, p. 16, 新版, p. 12-13) 池田先生はこの箇所「釈尊が、間を空けずに、二度、三度と、連続して国土を変え続けた」で本果妙を説いていたと捉えることができよう。一方で削除された箇所「もう一歩深く日蓮仏法から見れば、この挑戦を起こした瞬間、生命は大変革を遂げています」は本因妙である。

釈迦の仏法は原因の後に結果が来るが、日蓮仏法は原因に結果を含むので、凡夫のまま成仏できるという教えである。故に無作三身の仏が主人公であり、色相莊嚴の釈尊よりも勝るのである。この箇所を削除したのは釈尊の仏法＝本果妙＝劣 大聖人の仏法＝本因妙＝勝という構図を削除したかったからと考えられよう。勿論悪質な削除である。

② 小題が「人類を結ぶ大瑞相」で本文は次の通り。

「文明論」の観点から言えば、三変土田は人類文明の共和の象徴です（中略）さらに三変土田を「境涯論」から論ずれば、釈迦・多宝の二仏が、いかに無量無辺の徳を具えていたかを示しています。三変土田は、三世分身の諸仏の統合の原理でもある。全宇宙の仏菩薩が、師を求めて、はるばる娑婆世界に來下してきたのです。法華經を説く仏とは、それほどまでに広大無辺な慈悲と英知に満ちた偉大な境涯なのです。それは、根底にある妙法の偉大さです。そして、妙法に生き抜く創価の友も、この境涯を聞いていけるのです」（旧版一卷、p. 16-17）しかし、新版（p. 13）では小題を含めてこの箇所が全部削除。

私見：全宇宙の仏菩薩が偉大な師匠を求めて娑婆世界に來下してきた、そしてその師匠は妙法故に偉大であると池田先生は述べられている。それではその師匠は誰なのかこの箇所では釈迦・多宝の二仏しか述べられていないが、後にこの師匠が誰であるかが解き明かされる。それが都合が悪かったのではないかと思われる。全てを削除しこのシリーズの最重要箇所を破壊しているのである。

③ 「その根本が「祈り」である。南無妙法蓮華經は、最も偉大な幸福の法則です。御書に「久遠元初の自受用報身無作本有の妙法を直に唱う」（御書八七五頁）とあります。妙法を唱えれば、その瞬間に、久遠元初の大生命が発動します。その時、過去の宿業に左右されるような不幸は、乗り越えているのです」（旧版一卷、p. 39）。しかし、新版（p. 155）でこの箇所を、「妙法を唱えれば、その瞬間に、久遠元初の大生命が発動します」へと書き換え。

私見：「久遠元初の自受用報身無作本有の妙法を直に唱う」、即ち無始無終の過去よりすでに仏であった存在である自受用報身が本来所有していた題目を直ちに唱える、という意味である。これは本因妙抄であるが、池田先生はこの口伝をここで引用することで、文底に秘められた「全宇宙の仏菩薩が求めた偉大な師匠」がだれかをここで説明されたと考えてよいであろう。又、この引用は、池田先生が戸田先生の教えに従って口伝を重要視していた文証にもなる。

講義「人類を結ぶ大瑞相」とこの箇所は間接的に繋がっており、文脈上この講義は旧版の順番でなければならない。事実、旧版では、「人類を結ぶ大瑞相」(p. 16)から本因妙抄(p. 39)まで、近いページ数で講義が配置されている。ところが新版ではこの箇所が p. 155へと配置され、しかも「久遠元初の大生命が発動する」という単法本尊論に置き換えられている。この解釈は、題目という仏界の根源を発動することで、自分自身の仏界が湧現するというものであろう。これは伝統的な創価学会の**人法一箇論**とはまるで違う邪義でしかない。

既に述べてきたように、本尊とは「寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり」(三大秘法稟承事, 旧版御書, p. 1022)であり、この御書が信頼できる御書であることが証明され、池田先生が引用された本因妙抄の御文と全く同じ意味をもつことから、この新版の書き換えは不当であることが証明できよう。

④ 「地涌の菩薩は、無量の長い時間、昼夜を問わず一心に「師弟の道」を精進し、轟々堂々たる境涯を開いたのです。この法華經の一文を受けられて日蓮大聖人は、仰せになられました」(旧版一卷, p. 23-24)しかし、新版, p. 73では、「この法華經の一文を受けられて日蓮大聖人は」を「この法華經の一文について日蓮大聖人は」に書き換え。さらに原文にはない文「仏法を行ずる地涌の菩薩が、瞬間瞬間、仏の生命を現していることを示されています」池田大作. 御書と師弟 新版 (p.73). 聖教新聞社. Kindle 版.を追加。

私見：たったこれだけの書き換えであり、意味は変わらないなどと考えるはいけない。「法華經の一文を受けられて」という表現は、大聖人の生命に法華經(南無妙法蓮華經)が元来内在していたことを仄めかしている。御書の文証には「此の事(觀心の法門)日蓮身に当るの大事なり之を秘す」(觀心本尊抄送状, 旧版御書, p. 255)があげられる。これを「法華經の一文について」と書き換えると、南無妙法蓮華經と一体というニュアンスが消え、法華經という対象を大聖人(主体者)が語るという人法が分離された意味に変化してしまうのである。更に、「仏法を行ずる地涌の菩薩が、瞬間瞬間、仏の生命を現している」と付け加えることで、地涌の菩薩(大聖人)は、元来仏の生命を所持していたのではなく、仏道修行することで、瞬間的に仏の生命を湧現させているという「日蓮大菩薩論」に陥れていると評価できよう。

⑤ 「**釈迦仏が我ら衆生を成仏に導くために主師親の三徳を具えられていると**思っていたが、そうではない。反対に、**仏に三徳を被らせているのは凡夫である一。仏の偉大な徳も、凡夫がいればこそ輝くのだ、との仰せです。(中略)ここでいう凡夫とは大聖人御自身の御事です」** (旧版一卷, p. 47-48) しかし、新版 (p. 162)では「ここでいう凡夫とは大聖人御自身の御事です」を削除。

私見：諸法実相抄は凡夫である大聖人が本仏（無作三身の仏）であり、釈迦・多宝は迹仏であることを説いた重要な御書であり、池田先生はこの御書をここで講義することにより、p.18で述べられた、全宇宙の仏菩薩が求めた偉大な師匠は誰であるかという答えをここで述べようとされたと推測できる。ページ数の距離からしても、この解釈は妥当であろう。しかし新版では凡夫即大聖人という**最重要の箇所を削除**することで、何か別の解釈を与えようとしているのである。しかもこの講義を p. 162に離して配置することで、文脈上の繋がりを壊してしまうという悪質な配置がなされているのである。

⑥ 「**それを聖職者らが自分たちの権威づけに利用し、民衆と隔絶してしまっ**た。仏教の歴史を大転換したのが、大聖人の**「凡夫即極」の法門です。仏に照らされて衆生が輝くのではない。むしろ凡夫こそが、仏を仏たらしめている主役なのだ一このように「仏と凡夫」の考え方を逆転させたのです。その裏づけとなるのが「諸法実相」という甚深の法理です」** (旧版一卷, p. 49) しかし新版 (p. 163)で、「**仏に照らされて衆生が輝くのではない。むしろ凡夫こそが、仏を仏たらしめている主役なのだ一このように「仏と凡夫」の考え方を逆転させたのです**」を完全削除。

私見：この箇所を削除することにより凡夫こそが主役・仏（釈迦仏）は脇役、即ち大聖人が本仏であり、釈尊は迹仏であるという構図を潰そうとしたと考えられる。この削除は根本教義の破壊そのものであり極めて悪質である。

⑦ 「**実相である「妙法」そのものを唱え弘めゆく凡夫こそ、最極の法に生きる尊貴な仏なのであります**」 (旧版一卷, p. 50) しかし、新版 p.163-164でこの箇所を削除。しかし次の箇所は削除していない。

凡夫は妙法の当体（体の仏）だからです。これに対し、**経典に説かれるさまざま**な仏は、すべて妙法の働きを示した姿（用の仏）であり、「**迹仏**」（仮の仏）にすぎないとされています。池田 大作、御書と師弟 新版 (pp.163-164)、聖教新聞社、Kindle 版。

私見：新版ではどうも、凡夫を密かに釈迦と解釈できるような操作をしているように思える。しかし、「妙法」そのものを唱え弘めゆく凡夫」という言葉を残したのであれば、妙法を唱える凡夫は大聖人以外に存在しないことになり、大聖人が本仏となってしまう。このためにこの箇所を削除したのではないかと考えられる。

⑧ 「わが生命を妙法のために捧げていけば、その魂は、御本仏日蓮大聖人の大生命と一致します。大宇宙の仏界の大生命と一体化していくのです。妙法を弘めるために働き、妙法のために苦勞して戦い、妙法のために人生を生き切る人は、最極の生命の次元に融合する」（旧版, p. 82）しかし、この箇所を、次のように書き換え「わが生命を妙法のために捧げていけば、その胸中には、末法の御本仏・日蓮大聖人の大生命と同じ仏の生命が現れます。大宇宙の仏界の大生命と一体化していくのです」 池田大作. 御書と師弟 新版 (p.87). 聖教新聞社. Kindle 版.

私見：旧版では「御本仏日蓮大聖人の大生命と一致」、即ち大聖人に祈ること、大聖人の大生命に感応するという解釈、即ち「祈りの対象としての本仏」であり、本仏＝絶対存在であるのに対し、新版では「日蓮大聖人の大生命と同じ仏の生命が現れます」と書き換えることで、大聖人と同様の生命状態が自分自身に現れるという「模範的存在」、本仏＝到達モデルに格下げされている。これは実質上は日蓮大菩薩論であり、本果妙の仏法であり、本因妙の仏法とは到底いいがたい。ここでも根本教義が破壊されているのである。

⑨ 「その和合僧団そのものが、主師親の三徳を具えた御本仏の人法一箇の大生命なのです」（旧版二巻, p. 31）しかし、新版 p. 244でこの箇所が全て削除。

私見：御書と師弟2巻で「**人法一箇**」という語彙が掲載されているから、必ず第二版ではこの語彙が削除されているだろうと予想していた。その通りである。そこまでして、大聖人を祈りの対象から外し、名前だけの御本仏に貶めたい目的は何なのであろうか疑問である。

⑩ 小題が「聞法下種」の拡大こそ弟子の誉れ」で、本文が次になる。「この大聖人の御名を語り広げること、そのまま南無妙法蓮華經の大白法を広げる「聞法下種」の拡大となる」（旧版二巻, p. 35）しかし、新版 p. 246-257では、この小題を「師匠を宣揚することが弟子の誉れ」に書き換え、先ほど引用した文を全部削除。

私見：この箇所は、**人法一箇**を別の角度から簡潔に言及したものと見える。即ち**南無妙法蓮華經とは大聖人の御名前**ということである。この箇所が、大聖人を祈りの対象としない現在の創価学会の教義には邪魔だったのであろう。**密かに削除**されている。しかし致命的な矛盾がここに発生する。既に述べたことだが、**新版の法華経方便品・自我偈講義ではこの箇所は削除されていない**。「大聖人は「無作の三身とは、末法の法華経の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華経」と云うなり」とも仰せです」(同書 p. 187-188)

一方では大聖人の御名前＝南無妙法蓮華経を削除（事実上の否定）しておき、もう一方では削除していないのは**自己矛盾**以外の何物でもなく、その正当性が問われることから逃れることはできないのである。

⑪ 「まさしく地涌の菩薩は、師と共に、いな、師に先んじて、久遠の過去から永劫の未来へ と突き進む「師弟不二」の勝利の魂を明かしているのです」
(旧版2巻, p. 66-67) しかし、新版 p. 260では、「師と共に、いな、師に先んじて」を削除。

私見：ここでいう師とは釈尊のことで、一応文上の法華経、釈迦の弟子日蓮という世界観を池田先生は説いているが、「師に先んじて」、即ち師匠よりも先（久遠成初）に既に仏であったという文底の法華経の世界観を池田先生は仄めかしていると考えられよう。この部分が不都合だったのであろう。**密かに削除**されている。

⑫ 「法本尊開頭の書」 旧版三巻, p. 87 及び 「人本尊開頭の書」 旧版三巻, p. 88が、新版 p. 308では**共に削除**。

私見：この削除はもはや驚くべきことではない。大聖人を祈りの対象から外すための操作である。

問題その（二）五老僧と罰に関する指導の改変

① 「虚栄は師弟を破壊する」(旧版一巻, p. 53) しかし、新版 p. 165では次のように書き換え。「恐れるべきは虚栄です」

私見：この著書のタイトルは『御書と師弟』である。師弟破壊という重要なテーマをこのように書き換えるのは問題があると思われる。そもそもなぜ「師弟を破壊」という言葉を消したのか疑問である。 7/37

②「皆様方において、一体、誰が御本仏の未来記を現実のものとしてきたでありますでしょうか。この大福德は、未来永遠にわたって無量無辺であります。ゆえに、広宣流布の闘士である皆様方を侮辱し迫害する者は「豈大悪人に非ずや」であり、仏罰もまた厳然である。御本仏が御断言です。その厳しき因果の現証は、皆様方がご存じの通りであります」(旧版一卷, p. 65-66)」しかし新版 p, 229では、「ゆえに広宣流布の闘士である皆様方を侮辱し迫害する者は「豈大悪人に非ずや」であり、仏罰もまた厳然である。御本仏が御断言です。その厳しき因果の現証は、皆様方がご存じの通りであります」の箇所を全て削除。

私見：仏罰に関しては、池田先生は様々なところで講義されている。例えば次のスピーチなどである。「日顕宗は、御書に背く邪義を振りまわし、この創価学会を切った。清浄な学会を破壊し、広布を妨げようとした。ゆえに、彼らの祈りは、絶対になかない。御書に仰せのとおり、日顕宗が仏罰を受け、滅亡の一途をたどっている現在の姿は、あわれな過ぎりである。思えば、大聖人一門を迫害しぬいた平左衛門尉頼綱は、熱原の三烈士を斬ってから十四年後、反逆罪で一族もろともに滅んだ。因果の理法は、必ず現証としてあらわれる。これが仏法である」(池田大作全集96巻, スピーチ, p. 105)

実はこの話には、学会員にはあまり知られていないと思われる続きがある。平左衛門尉頼綱と共に、大聖人を迫害した北条家はその後どうなったのか。1333年、新田義貞の鎌倉攻めによって幕府が滅亡する際、東勝寺という寺で北条一族や家臣たち約870名が集団自害(東勝寺合戦)を遂げて滅亡するのだが、当時10歳程度だった北条時行だけは信濃へと逃れてこの地獄を生き延びる。そして北条家の残党を率いて足利家と戦い続けるのである。一時は鎌倉を占拠(中先代の乱)する活躍をするのだが、最後は捉えられて竜の口で処刑され、ここに北条家の血筋は途絶えてしまうのである。大聖人を竜の口で処刑しようとしてからちょうど82年後の出来事である。大聖人は熱原の法難の時、次のような予言を遺されていた。「過去現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣万民始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず」(聖人御難事, 旧版御書, p. 1190)勿論科学的観点からは罰というものの証拠は何もない。私が今述べたことは歴史的事実以上のことではない。従って、これらは単なる歴史的な偶然だとか、或いは、どうせ法華經はゴータマ以外の連中が作成した偽經だからなどと考えるのはその人たちの自由である。だが、かつて大聖人を亡き者にしようとした側が、全く同じ場所で自分たちの血筋が絶えてしまうという歴史的事実に、厳しき因果応報を感じてしまうのは私だけではあるまい。さて、なぜこの罰の箇所を編集者たちは削除したのであろうか。

③ 「御本仏の時代でさえ、五老僧をはじめ、心の底では師匠を見下し、我偉しと思う 増上慢の輩が多かった」(旧版一卷, p. 84) だが、新版では、次のように書き換え。「大聖人御在世の当時でさえ、心の底では師匠を見下し “我偉し” と思う増上慢の輩が多かった」池田大作. 御書と師弟 新版 (p.88). 聖教新聞社. Kindle 版.

私見：なぜ編集者たちは「五老僧をはじめ」を削除したのであろうか。そして「御本仏の時代」を「大聖人御在世」と書き換えている。これは何を意味するのであろうか。

④ 「学会でも、戸田先生の事業が苦境に陥るや、悪しざまに先生を罵倒して去っていった者たちがいた。これが人間界の実相です」(旧版一卷, p. 84) しかし新版では、「悪しざまに先生を罵倒して」を削除して次のように書き換え。「学会でも、戸田先生の事業が苦境に陥るや、去っていった者たちがいた。これが人間界の実相です」池田 大作. 御書と師弟 新版 (pp.88-89). 聖教新聞社. Kindle 版.

私見：なぜこの箇所を削除したのであろうか。退転した連中が如何に戸田先生を悪しく敬っていたかを示す歴史的証言である。それを消すのは不適切であろう。

⑤ 「大恩ある学会に反逆した退転者たちは皆、勤行・唱題を怠け、学会活動を疎かにし、魔に食い破られて己の増上慢の生命の虜となってしまった。そして人生が狂い、無惨に滅んでしまったことは、皆様がよくご存じの通りです」(旧版一卷, p. 84) しかし新版では、「そして人生が狂い、無惨に滅んでしまった」という罰論の箇所を削除しているのである。次がそれである。「大恩ある学会に反逆した退転者たちは皆、勤行・唱題を怠け、学会活動を疎かにし、魔に食い破られて己の増上慢の生命の虜となってしまったことは、皆様がよくご存じの通りです」池田 大作. 御書と師弟 新版 (p.89). 聖教新聞社. Kindle 版.

私見：先ほどと同じく罰論の箇所を削除している。これは何を意味するのであろうか。

⑥ 「親難辛苦を共にした師弟不二の一日、また一日、私は先生の境涯の奥の底まで教えていただいたのです。この大恩に感謝は尽きません。」 9/37

反対に、多くの弟子たちは、先生が苦境に陥るや、先生を裏切って退転していきました。それまで忠義ぶっていたにもかかわらず、態度を豹変させて「戸田の野郎」と罵って去った恩知らずもいた」（旧版一卷, p. 98）だが新版, p. 100では、次の箇所が全て削除。「反対に、多くの弟子たちは、先生が苦境に陥るや、先生を裏切って退転していきました。それまで忠義ぶっていたにもかかわらず、態度を豹変させて「戸田の野郎」と罵って去った恩知らずもいた」

私見：大幹部が、いざ師匠が苦境に陥るや、如何なる態度で戸田先生を裏切っていったかの歴史的証言である。なぜこの貴重な箇所を削除する必要があったのか。ここに師弟の精神が果たしてあるのだろうか。

⑦「大聖人は「恩を知るのを人間と名づけ、知らないのを畜生とする」（御書四九一頁・趣意）と厳しく戒めておられます。戸田先生の恩を忘れ、口汚く罵って裏切っていった畜生道の輩の末路が、どれほど無惨なものであったか。また、近年も、学会の大恩を踏みにじった反逆者たちが、どれほど佻しい姿を見せて滅んでいったか。正邪の現証は明確です。皆様がよくご存知の通りであります」しかし、新版, p. 101では、次の箇所が全て削除。「戸田先生の恩を忘れ、口汚く罵って裏切っていった畜生道の輩の末路が、どれほど無惨なものであったか。また、近年も、学会の大恩を踏みにじった反逆者たちが、どれほど佻しい姿を見せて滅んでいったか。正邪の現証は明確です。皆様がよくご存知の通りであります」

私見：師匠に反逆した者たちの末路に関して言及した箇所が全て削除されているように見えるが、これは如何なる意味を持つのであろうか。

⑧「その安国論を、大聖人は晩年まで、弟子たちに御講義なされました。御自身の全生命を傾けられ、後継の門下に「立正安国」の魂暁を伝え残そうとされたのであります。こうした師の深き一念に応え抜いたのが、日興上人であり、日目上人であられました。二十三歳の若き俊英であった日目上人は、大聖人の命を受けて、天台僧との法論に臨み、敢然と相手を論破されています」（旧版二巻, p. 139）しかし新版 p. 283-284では、「こうした師の深き一念に応え抜いたのが、日興上人であり、日目上人であられました。二十三歳の若き俊英であった日目上人は、大聖人の命を受けて、天台僧との法論に臨み、敢然と相手を論破されています」をごっそりと削除。

私見：この書のタイトルは『御書と師弟』である。

大聖人の教えを只一人守り抜かれた日興上人、そしてその後継者の日目上人がいなければ、日蓮大聖人の教えは後世に正しく伝わっておらず、本尊も釈迦の仏像になってしまったであろう。そして、創価の三代に渡る師弟も存在しなかったのは確実である。なぜこの箇所を削除したのであるか。なお、こちらにはなぜか日目上人に関する戸田先生の講義が削除されていないので、参考としてここに引用しておこう。

「戸田先生は語られました。「広宣流布の暁には、釈迦や大聖人門下の弟子に劣らない弟子が出てくる」「この時には上行菩薩、安立行菩薩、浄行菩薩、無辺行菩薩、その他もろもろの菩薩が出られ、また、もったいなくも、日目上人様をはじめはじめとして、太田入道殿、四条金吾殿等、大聖人様御在世当時に活躍した方々が、今度の広宣流布に遅れることなく、全部出ておいでになることと、絶対に信じて疑わざるものであります」池田 大作. 御書と師弟 新版 (p.126). 聖教新聞社. Kindle 版.

⑨「この日興上人の大闘争こそ、真正の弟子の鑑であります。どこまでも師匠を求め抜き、師匠の名を叫び、師匠の真実を訴え抜いていく以外に、仏法正義の命脈を広げゆくことはできない。師匠に打ち込んでいただいた折伏精神を失い、世間に迎合して、広宣流布の和合を破壊するような五老僧の末流とは、断固として戦い抜くのです」(旧版2巻, p. 36-37) しかし新版 p. 247では、次のように書き換え。「どこまでも師匠を求め抜き、師匠の名を叫び、師匠の真実を訴え抜いていくことが、仏法正義の命脈を守り広げゆく根本です」池田大作. 御書と師弟 新版 (p.247). 聖教新聞社. Kindle 版.

そして最重要箇所「師匠に打ち込んでいただいた折伏精神を失い、世間に迎合して、広宣流布の和合を破壊するような五老僧の末流とは、断固として戦い抜くのです」を完全削除。

私見：正直なところ、この削除は笑ってしまった。なぜ内部の五老僧と戦えという極めて重要な箇所を削除する必要があったのであろうか。戸田先生は次のような遺言を残しているのではないか。これを無視する道理はあるまい。「広宣流布の最後の敵というのは内にこそある。城者の裏切りが城を破るのだ。あの五老僧を見たまえ。五老僧は過去の話ではない」(戸田先生『人間革命』第12巻, p. 319)この教えを受け継ぎ、池田先生もつぎのようは講義を遺されている。時期的には、『御書と師弟』の連載が大白蓮華で始まる少し前になる。従って内容的にも近いものがあると考えてよいであろう。 11/37

「戸田先生が厳しく言われた通りである。『敵は外部にあるように見えるが、最も悪質な敵は、内部に出る』。だから、毒を撒き散らす内部の敵とは戦わなければならない。放っておいたら、毒がいつしか充満し、皆の純粋な信仰が破壊されてしまうからだ。ゆえに師敵対の輩とは断固、戦い続けるしかない」(池田先生「大白蓮華」 2008年5月号, p.56)

破和合僧とはなんぞや

この類の本を執筆したら、必ず、組織の団結を乱すな！破和合僧だ！などと叫ぶ連中が出てくるであろう。それでは聞きたい。破和合僧とはなんぞや？池田先生のスピーチにこうある。「戸田先生はまた、このとき、「異体同心の心」というものは、心ではないのです。異体同心の心は、信ずる心です。信仰が同じという意味です。それが異体同心である。その心が強ければ強いほど、いかなることがあっても、青年は敗れることはない」(同前)と述べられた。異体同心とは、たんに仲がいいとか、気が合うとか、そのような表面的次元の問題ではない。生命をかけて御本尊を信じ、何があっても大聖人の御生命から離れない。どこまでも、ともに進んでいく。その不退の「信心」と、異体同心の「心」である。その信仰の一念と広宣流布という目的が同じであるゆえに同志であり、異体同心なのである」(池田大作全集69巻, スピーチ 妙法で永遠の栄光の軌跡を, p. 523) つまり、体は異なれども、師弟ともに同じ信仰をすることこそが異体同心の信心であり、これを外から内から破ることが「破和合僧」と定義できよう。それでは私が問題視する2010年以降に始まった教えが牧口・戸田そして2010年以前の池田先生の信仰と断絶していることである。牧口・戸田先生の時代には存在し、現在の創価学会には存在しない教義は存在している。日蓮御影像や国立戒壇等がそれである。しかしそれらは枝葉の教義であり、変えてもよいものである。一方で根本教義である三大秘法は永遠に不変でなくてはならないものである。もう一度池田先生の指導を引用しよう。

「時代を超え、社会の制約を超えて変わらない、宗教の「本質的なもの」を生かす。そうでない余分なものは分離する。そうしなければ、宗教の未来はないし、人類の精神的向上もないというのである(トインビー博士の宗教改革の話)。『本質的なもの』とは、私どもでいえば何か。御本仏日蓮大聖人への帰命である。大聖人が説かれた三大秘法に対する信心である。いわば根幹の化法である。『付随的なもの』とは、時代や場所によって変化する部分であり、とくに後世の形式・儀式すなわち化義等である」(『池田大作全集』第84巻 p. 336) 次の池田先生の発言も重要である。

「仏教では祈る対象が、最も重要になります」(仏法と宇宙を語る1巻, p. 39)
「仏教では、根本の教義についての変更は許されない」(池田大作・ウイルソン『宗教と社会』上 p. 51)そして池田先生は、日興門流の根本教義を内部から変えようとした笠原慈行を次のように厳しく批判された。

「笠原慈行が、どんな日本精神を鼓吹しようとも、それは自由である。しかし、日蓮大聖人の嫡流である日蓮正宗の僧侶が、その**根本教義を勝手に歪曲することは、許さるべきことではない**。この許さるべきでないことを、彼は早くから敢行していた」(人間革命6巻, 推移の章, p. 174)戸田先生が笠原慈行をどう考えていたかは人間革命11巻大阪の章に詳しく述べられている。「御書の仰せに嘘はない。あの笠原慈行のことを考えてみ給え。神本仏迹論を唱え、謗法の日蓮宗との合同を画策する悪侶が、正宗の高僧のなかから出てくるなどと、誰が予測しただろうか。まさに獅子身中の虫であり、悪鬼入其身の姿そのものだ」(人間革命11巻, 大阪の章, p. 211)戸田先生はこの笠原慈行を「**程度が低い**」「**僭聖増上慢**」(同書, p. 212-213)と考えられていた。さてここで2010年以降、祈りの根本である三大秘法がどう変化したかもう一度おさらいしてみよう。

2010年以前の創価学会の教え

「此の自受用身の人格に妙事の三千の法が具って居る処が**人即法の本尊**であり、三千の法に自受用身の具って居る処が**法即人の本尊**であり此の互具一体の処を**人法一箇**とも**一体とも**申して私達の帰依する仏様であります」(牧口常三郎全集10巻, 尋問調書抜, p. 197)

「**人法一箇**とは、仏法の大眼目であり、正邪の判別はこれにある。南無妙法蓮華經即日蓮大聖人様であるにもかかわらず、邪宗では、南無妙法蓮華經の法を立て、久遠実成の釈迦を人に立てている。人法のそろわぬことは大問題である」(戸田城聖全集4巻, 人に長たる資格もて, p. 67) **「法華經という法のみでは、真実の成仏の道には入れない。法華經を身でもって読み、人法一箇の当体とあらわれてくださった日蓮大聖人に直結した信心—これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華經をたもっていても無益なのです**」(生死一大事血脈抄の池田会長講義, p. 112)

「大聖人は、この無作三身如来としての御自身の生命を、そのまま一幅の漫荼羅として御本尊に顕された。そこに人法一箇の御本尊たるゆえんがあります」(池田大作全集24巻, 観心本尊抄講義, p. 228)

2010年以後の創価学会の教え

『妙覚の釈尊』とは、究極の覚りを得た仏としての釈尊のことである。この究極の仏身は、妙法と一体であると拝することができる」 創価学会教学部. 世界広布の翼を広げて 教学研鑽のために 観心本尊抄（第2版）（p.130）. 聖教新聞社. Kindle 版.

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

2010年以前の創価学会の教え

「日蓮大聖人が仏滅二千年の後、第五の五百歳に出現なされた。大聖人がこの末法に日本の国へ生れなければ、経文がうそになってしまう。故に**釈尊は前の仏であり、大聖人は後の仏である**」（牧口常三郎全集10巻，大善生活実証録，p. 144）

「釈迦滅後二千年後においては、釈迦の法華経も、天台の理の一念三千も、その機能を及ぼさない。いかんとなれば、**釈迦滅後二千年後の末法の衆生は本未有善の衆生**といって、**釈迦の仏法にも、他の仏にも縁を結ばない、荒凡夫の衆生である**。ここにおいて、末法の本仏たる日蓮大聖人、凡夫のお姿として末法に出現して、一切経の哲理をジッと見つめられたのである。しこうして、**久遠元初の自受用身であり上行菩薩の再誕**であることを自得し遊ばすや、ここに、一切衆生を幸福に導いていく本尊を、出現せしめたのである」（戸田城聖全集1巻，科学と宗教，p. 103）

「**末法になってくると、釈迦の仏法の功力がありません。釈迦にだれも縁のないわれわれなのですから、助かりようがない**」（戸田城聖全集4巻，宗教と人生，p. 347）

「釈迦の仏法でも運命は転換しないこともないが、いまはそんな方法をやっ
てられない。そこで、大聖人様は、われわれのために、**釈迦ではとうていお
よばない大御本尊様**をおつくりあそばされたのです」（戸田城聖全集4巻，宿命
転換の大仏法，p. 347）

「釈迦の仏法では、今世にはおよばないのです。今世ではだめだ、来世にいか
なければだめだというのです。これはまことに困った話です。もし、仏教の解
決がこれだけであるならば、私は、仏教信者にはならない。 14/37

ごめんこうむる。来世などと、ほんとうになるかならないかわからないのだから。ところが、大聖人様の仏法は、それから一步ぬきんでているのです。だから、われわれは「釈迦の弟子ではない。釈迦仏法はだめだ、大聖人様の仏法でなければならん」と絶叫する。大聖人様は、こういうことをおっしゃっています。「ここに、御本尊様というものをこしらえるぞ。この御本尊様に向かって、南無妙法蓮華経と唱えるならば、過去世につくっておかなかったところの原因を、運命を打開するところの原因を、即座にやる」と、こうおっしゃっている。これは、じつにありがたいことです」(戸田城聖全集4巻, 現世で宿命打開, p. 328)

「日蓮大聖人は、釈尊よりも百千万億倍すぐれた御本仏である。大聖人に相対すれば、迹仏である。釈尊は太陽の光に照らされて、ささやかな光を放つ月の如き存在なのである。下山御消息には『**教主釈尊より大事なる行者一日蓮**』と仰せられ、諫曉八幡抄には、釈尊を月に例え、大聖人を日に例えられている。」(『御義口伝講義』上 p. 770)

「大聖人は仏であらせられるのである。しかも、**その位は釈迦等の到底及ぶ分際ではない**」(『折伏経典』池田大作監修 p. 316)

2010年以後の創価学会の教え

「五百塵点劫よりこのかた御弟子とならせ給いて一念も仏をわすれます大菩薩」と仰せの通り、**久遠の仏と強い絆をもっています**」(世界の青年とともに 新たな広布の山を登れ, 曾谷入道殿許御書, p. 65)

「学会員は皆、**尊き「教主釈尊の御使**」であるからこそ、リーダーはどこまでも「**会員根本**」「**会員第一**」で進んでいただきたい」(勝利の経典御書に学ぶ 15巻, 四条金吾殿御返事(梵音声御書), p. 105)

・・

2010年以前の創価学会の教え

「仏滅後二千年以後を末法とする現代に於てはその「**法華経も余経も詮なし**。」と証明されてゐるものがあれば、吾々はそれに則って、之を各自の生活に応用して見さへすればよいのである」(牧口常三郎全集10巻, 価値創造, p. 26)

「釈迦の法華經を信仰しても、すこしも功德を受けられないので、かえって害があるのであります。十日もたったごはんが、カビがはえて腐っていたら、腹をこわすにちがいありません。釈迦の仏法は、腐ったごはんであります。これを平気で食わせている邪宗の坊主も坊主なら、それを知らんで食っている信者も信者であります。末法の仏様は**久遠元初の自受用報身如来**、またの名は**南無妙法蓮華經様**という**仏様**であります。この仏様の御力は、宇宙大の御力を持ち、宇宙それ自体であります。永遠の御力を持ち、あらゆるものを変化させていく御力をもった仏様であります。この**仏様は、垂迹として、釈迦の法華經では上行菩薩となり、末法では日蓮大聖人様として再誕**されたのであります。これがわからないのが、中山、身延、交成会等の邪宗であります」(戸田城聖全集4巻、日蓮大型人様は末法の御本仏 , p. 35)

「末法の教えとは、釈迦仏法はすでにその効力を失ったがゆえに、ただ、法華文底深秘の大法、すなわち、日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華經の教えがあるのみである。これがゆえに、「三秘密の法を持ちて」とおおせられているのである」(戸田城聖全集1巻、王仏冥合論 , p. 205)

「いうならば、「本因妙」の仏法は、太陽が無限の光彩を放ちながら昇りゆく姿といえる。それに対し、**インド応誕の釈尊の仏法は、夕日の沈みゆくがごときものである** (中略) これに対し釈尊の仏法は、過去遠遠劫より調機調養されてきた有縁の衆生を救済する役割が、**すでに終わった仏法**となるのです」(仏法と生命を語る上巻, p. 318-319)

「文底の南無妙法蓮華經が出現した以上、**法華經の本迹は、ともに捨てるべきことは論をまたない**」(『人間革命』第9巻、小樽問答, p. 136)「釈尊の法華經の迹門不変真知の理も本門随縁真知の智も、大聖人の仏法から見れば、ともに、理であり、迹門にすぎません」(新・人間革命6巻、若鷲の章, p. 344)

2010年以後の創価学会の教え

「ここでは「仏が在世に法華經を説かれたのはただ八年である」として、月の光に譬えられています。一方、末法の「長き闇」を照らす太陽もまた法華經です。日月は共に法華經の比喩であり、込められた願いも娑婆世界の一切衆生の救済で、その心は同じです。」(世界広布新時代への指針, p.16)

2010年以前の創価学会の教え

「**釈迦が迹仏**であることは、いうまでもない。それは、**久遠元初の自受用身を本仏とするがゆえ**」(人間革命6巻, 推移の章, p. 178)

『無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり』無作の三身の仏の宝の名前を、南無妙法蓮華経というのである、と。すると前にいった南無妙法蓮華経如来寿量品の如来に、きちっとかかってくる。**この如来は大聖人様をおいてはないのです。**『寿量品の事の三大事とは是なり』これが三大秘法の根幹であるというのです。このように、如来寿量品の如来をば、文底の仏であると、しっかり胸に刻んで、私の講義を受けてもらいたいと思います」(人間革命7巻, 原点の章, p. 89)

「**南無妙法蓮華経とは、日蓮大聖人の御生命そのものであり、ゆえに大聖人は、十方三世の諸仏を動かしていく当体**であられる(中略)法華経本門において、仏の本地を久遠実成と明かしたということは、久遠五百塵点劫成道の仏身が本地で、それ以前の始成正覚の釈尊は、当時のインド社会というスクリーンに映った影となるのであります。更に、地涌の菩薩が、本地・久遠元初の自受用報身如来であるということは、久遠元初の仏が法華経の儀式というスクリーンのうえに映した一つの影ということになるのであります。地涌の菩薩ばかりでなく、**釈迦、多宝の二仏も、久遠元初の自受用報身即南無妙法蓮華経という本地の仏が、虚空会の儀式のうえに映し、あらわした影である**」(池田大作全集24巻, 諸法実相抄講義, p. 41-42)

2010年以後の創価学会の教え

「大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は「法華経」本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが主題の「南無妙法蓮華経」の脇士に位置づけられている。これは「南無妙法蓮華経」こそがすべての仏を生み出した能生として、根本の本尊たるべきことを示している。したがって、先の文の趣旨は、「寿量の仏」そのものを本尊とするのではなく、「**寿量の仏**」が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とすることにある。」(教学要綱, p. 78-79)

このように比較すれば、違いは明らかであり、デマだとか、週刊誌と同じだとかいった詭弁は通用しない。**根本教義となる三大秘法である御本尊に関する解釈がごっそりと変えられているのである**。魔の働きとは、最高レベルの指導者の身に入り、師弟の教えを断絶する方向へと働く。池田先生は次のようなスピーチを遺されている。「断絶させてはならない」「魔につけ入らせてはならない」と法華経は説く。師から弟子へという「師弟の道」「後継の道」を断絶し、分断し、切断しようと、魔は働く。また、その分断のスキ間に悪鬼は働くのである」（池田大作全集77巻、スピーチ、p. 366）

御本尊があるから大丈夫、題目があるから大丈夫といった考えは日顕宗のそれと何ら変わらない。戸田先生はこう述べておられた。「大聖人の南無妙法蓮華経は三大秘法の大法であるから、文底の南無妙法蓮華経を唱えない者は、たんに南無妙法蓮華経と唱えたところが、生命を浄化しようはずがない。生命を浄化できないとすれば、なんの価値もない宗教である。いな、大聖人の開目抄におおせのごとく邪宗と呼ぶ以外にはない。邪宗なら、大聖人のおおせのとおり仏敵であり、人類の敵である」（戸田城聖全集3巻、幸福論、p. 38-39）

極めて遺憾ながら、教学要綱は絶対に正しい、これこそ池田先生が遺された究極の教えだと考えて、なにも理解せずしてこれを批判する者を仏敵呼ばわりし、釈迦の使い日蓮、南無妙法蓮華経は根本仏である釈迦の所有物、寿量の仏は釈尊、等々の邪義を擁護して弘めようとするものがあるならば、それは内部から仏法を破壊している行為に等しい。一体どこに牧口・戸田、そして2010年以前の池田先生の教えにこのような劣悪なものがあるのか。同じ信心どころか全く別の信心が学会内に広まっているのである。事実、SNSでは「釈迦こそ本仏」とする、信じられないような主張をするものが創価学会員の中に見受けられるのである。私が今まで見た中で一番驚愕したのは「文底など関係ない」、更に酷いのは「六老僧はそれなりに正しい」という主張で、これは流石に開いた口がふさがらなかった。これらの行為を破和合僧と呼ばずしてなんというのか。

戸田先生「組織は偉大な勇者をつくるか、さもなくば幼稚な愚者をつくる」

厳しくいふなれば、教学要綱を読んでこれは素晴らしいと思うのであれば、残念ながら教学の知識が完全に欠けているといわざるをえない。新入会のメンバーならともかく、何十年も信心してきた幹部でこれを賞賛するのであれば、それは既に幹部失格の姿であろう。 18/37

何も池田先生の書物を読んでいないし、読んでいても全く何一つ理解していない証拠である。師匠があまりにも偉大なので、自分では努力せず、組織におんぶにだっこのコバンザメ信仰といわざるをえない。組織が正しい信心をしていればこれでよいが、内部に獅子身中の虫が顕れたならば、たちまちそれに飲み込まれてしまうであろう。そして一番怖いのは他ならぬ内部である。戸田先生は次のような言葉を遺された。「広宣流布の最後の敵というのは内にこそある。城者の裏切りが城を破るのだ。あの五老僧を見給え。五老僧は過去の話ではない」（人間革命12巻、後継の章、p. 280）組織にべったりの者がよくするいいわけとして、原島某の元教学部長のような教学に精通したものが退転した例を取り出し、教学を身に着けたところで退転するんだということを言う連中がおるが、それは教学軽視の増上慢の姿である。元教学部長が退転したことと、幹部の教学力不足とは何ら関係がない。牧口先生の時代、多くの大幹部が退転したが、それは教学力の不足からきていたことを忘れるべきではない。そして、教学に精通しているものよりも、教学力不足で退転する者の方が圧倒的に多いことも忘れるべきではない。幹部の教学に対する取り組みに関して池田先生はこう述べられている。

「いちばん大切なことは、まず幹部が、もう一回、真剣に御書を学んでいくことだ。幹部みずからが、御書を拝し、感激し、納得して、それを語っていくことである。焦点は幹部である。幹部が向上しなければ、後輩も魅力を感じるわけがない。「慣れ」に流され、教学を軽視するのは、増上慢である。「最近、昔ほど教学を勉強していないのではないか」と憂える声もあった。御書根本が学会の魂である。この誉れの伝統を忘れてはならない」（池田大作全集93巻、p. 441-442）

池田先生が会長就任するころ、学会員はどのように教学を学んでいたのか。それを知る上で貴重な資料が新・人間革命2巻、p. 30にある。

「〈一般会員〉『大白蓮華』『聖教新聞』『折伏経典』の熟読

〈助師〉右の目標に加えて『方便品寿量品精解』と御書のなかで特に御消息文をマスターすること。

〈講師〉

右の目標に加えて、御書、特に十大部及び文段を完全にマスターすること。

〈助教授〉

右の目標に加えて、御書全編と『六卷抄』を全部勉強し、その奥底を極めておくこと。

〈教授〉

御書並びに『富士宗学要集』をマスター」

かつて創価学会員はこのレベルで教学を研鑽していたのである。この徹底して教学に取り組む姿勢こそが、小樽問答で身延派の学者たちを打ち破った原動力になったことは疑いのない事実である。大崎ルールでは通用しない相伝書に頼ったからなどではない。そう考えるのは単なる増上慢であろう。さて、この時代と比べて今の学会員は果たしてどうなのであるだろうか。現在は発刊されていない『六卷抄』や『富士宗学要集』はともかく、法華経や十大部すらまともに読んでいないのではないか。大白の教学欄を、ちょろちょろ目を通して、ハイおしまいではないのか。こうした姿勢は本当の御書研鑽とは程遠い姿勢であり、池田先生が若き日に研鑽した御書に取り組む姿勢とは180度違うものである。

遺憾ながら、組織それ自体が小さいときは、周りは釈迦を根本仏とする日蓮宗の敵だらけであり、必然的に皆、教学研鑽に励んで理論武装するしか広布を前進させる道はなかったといえる。しかし組織が巨大になって敵が周りから消えると、皆怠慢になり、難しいことは全部幹部に任せて、自分は題目上げて折伏して、選挙活動だけしておけば良いという姿勢になってしまうのではないか。そして肝心の幹部も、難しいことは大幹部に任せておこうという負の連鎖に陥ってしまう。こうした未来を予想したかのような戸田先生の発言があり、それを池田先生がスピーチされて遺されているのでそれを引用しよう。

「戸田先生はよく、「組織は偉大な勇者をつくるか、さもなければ、幼稚な愚者をつくる」といわれた。組織があまりに偉大であり、会員が純真であるために、かえってそれに甘えて、厳しい自己建設を怠る者も出てくる。そうなれば、いかなる理想的な組織も、組織悪の温床となってしまう」（池田大作全集72, スピーチ, p. 611）

こうした教学研鑽に対する怠慢な姿勢が池田先生が表に出なくなってから顕在化してきたのではないだろうか。そこに、『釈迦の弟子日蓮』『無始無終の根本仏・教主釈尊』『釈迦も日蓮も拝む対象ではない』等の邪義につけこまれる隙を与えてしまったと考えられるのである。

教学要綱は仏法上の不正な教義書

ゴータマ（釈尊）は大涅槃経で「師には握りこぶし（隠し持った秘伝）はない」と説いた。

これは、師匠は弟子に対して教えを隠したりはしないという意味である。池田先生はこの教えを法華經の智慧で言及されており、私は著書『教学要綱の意味するもの』で次のように議論した。

「池田先生は『法華經の智慧』（第5巻 p. 304-308）で、師匠の握りこぶしの話がされた。釈尊は、自分だけが持っている秘密の法などではなく、全てを包み隠さず弟子に明かしたということを簡潔に述べられている。これは即ちこの『法華經の智慧』において、池田先生は自分の知っている仏法を包み隠さず全て学会員に伝えますよ、という自負の表れでもあると考えても良いと思う。そして池田先生は、法主しか知らない秘密の法など存在しないと日頭を批判し、そのような師匠しか知らない握りこぶしを売り物にする宗教は邪教であると断定されている」（教学要綱の意味するもの, p. 8）

従って、晩年にきて突如、今まで教えてきた教えと真逆の事を弟子に対して説きはじめるとするのはこの仏法の根本精神に反するし、このような話をされた池田先生が自分の教えを覆して、「師匠の握りこぶし」を2010年に表舞台から姿を消してから開示するなど到底思えないのである。仮にゴータマを根本の仏とするのであれば、このような姿勢は根本仏に背く行為となるがそれでよいのであろうか。

教学要綱は身延が重要視する大崎ルールを用いているが、これほど異常なことはあるまい。池田先生は身延を大いに嫌っており、日向の口伝書である御講聞書が日蓮大聖人御書講義全39冊シリーズに含まれていないのはこのためと推測される。なぜ突如として身延の教義に迎合し始めたのか説明が必要であろう。この大崎ルールとは、小樽問答で創価学会に破れた身延が巻き返しを図るために用いてきた対抗策であることは既に述べたが、「アカデミック」の名の下に、かつて池田先生の最大の敵であり、しかも創価学会の根本教義である「日蓮本佛論」を解体する目的、及び身延の根本教義である「釈迦本佛論」を死守する目的で使用されている身延流のルールを採用することは言語道断である。これは撰時抄に説かれる「大慢のものは敵に随う」（御書二八七頁）という邪宗の悪侶の姿そのものである。又、開目抄（旧版御書, p. 237）には「愚人にほめられたるは第一のはぢなり」と説かれる。創価学会の目的はあくまでも広宣流布であり、身延の学者に迎合することではない。大崎ルールを用いて、身延等の日蓮宗の学者たちから認められたいのではないか、と思われても仕方がないような書物の構成法は大聖人の御誠心に背くものである。

又、いくつもの戸田先生の講義を、読者に理由ものべずに意味をずらして引用したり、**新版法華経方便品・自我偈講義**で**77箇所もの改変**（注）、新版『御書と師弟』でもいくつもの改変を行い、本来の講義の持つ意味を変えてしまうことも仏法における不正行為である。かつて池田先生はこのような行為を次のように厳しく批判されていた。

（注：図斉記）4. 28 拙文 <https://share.google/GDOcjCy25oTd57PTY> 25頁以降に**75カ所の変更、削除、改竄を掲載**、また、新たに発見の**76カ所目**を10頁に、**77カ所目**を48頁に記し置きました。**77カ所の不正**の全て現在及び後世の皆様のご高見を拝したく存じます。

「宗門は戦前、それまでの御書を発行禁止にし、そのうえ、御書の十四カ所を削除した。（中略）なかには、有名な「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」との御文も入っている。この大聖人の大確信があらわれるからこそ、私どもは世界第一の仏法として信仰できる。すばらしい御言葉である。宗門の先師日寛上人は、この御文を「日蓮大聖人が末法の御本仏であられる文証」の一つに挙げられている。その御文を削除したということは、宗門は、日蓮大聖人を御本仏と仰ぐ信心を否定したに等しい」（池田大作全集83, p. 300-301）

この池田先生の宗門への批判は、現在の創価学会の教学を直撃している。釈迦を無限の過去から続く永遠の仏とする現在の教学は、日蓮大聖人を事実上御本仏として崇敬することを辞めたに等しい。教学要綱の「日蓮本佛論」というのは実際は名ばかりで、その本質は、釈迦から渡された南無妙法蓮華経を難に負けずに弘め、初めて成仏したという「日蓮大菩薩論」でしかない。そして、あれほどの大量の改変を正当化し、日蓮大聖人の本意は釈迦こそ本仏であり、牧口・戸田先生が信じていたものは「方便」であったとでもしたいのであれば、そのような大聖人の予言が必要不可欠である。大聖人滅後800年後に、真の正しき教えが登場する、と。しかしそのようなものはどこにもない。その代わり、本来の正しい教えをあちこち改ざんし、意味を変えて弘めるものは「魔の伴侶」であり、そのようなものが末法に出現するという予言が開目抄に存在している。

「是の経閻浮提に於て当に広く流布すべし、是の時に当に諸の悪比丘有つて是の経を抄略し分ちて多分と作し能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の悪人復是くの如き經典を読誦すと雖も如来の深密の要義を滅除して世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す前を抄して後に著け後を抄して前に著け前後を中に著け中を前後に著く当に知るべし是くの如きの諸の悪比丘は是れ魔の伴侶なり」（旧版御書, p. 224）又、このようなものを見て皆、これぞ真の大菩薩であると褒めたえるといふ予言もある。

「善男子一闡提有り羅漢の像を作して空処に住し方等大乗經典を誹謗せん諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是大菩薩なりと謂わん」(旧版御書, p. 224) これらの大聖人の予言は果たして何を意味するのであろうか。

教学要綱等の誤れる教学書の責任は全て執行部にある

日興上人の遺言の一つに次のようなものがある。「予(日興)が老耄して念仏など申さば相構えて諫むべきなり、其れも叶はずんば捨つべきなり」(大石記) この日興上人の遺言を、池田先生がスピーチで講義されていた。極めて重要なのでそれを引用しよう。

「日興上人の仰せを、六世日時上人は、こう記録されている。「予が耄碌して念仏など申さば相構えて諫むべきなり、其れも叶はずんば捨つべきなり」私が耄碌して、念仏などを口にしたなら、必ず諫めなさい。それでも(私が)言うことを聞かなければ、私を捨てなさい。たとえ日興上人であろうと、法に背いた場合には、強く諫めて、聞かない時には捨てよ、と。いわんや、日興上人門下の法主については当然であろう。法主が絶対でないことを、ご自身を例に教えられていると拝される」(池田大作全集84巻, スピーチ, p. 246)

この件は池田先生その方にも当てはまるのは当然のことである。2010年以降、特に**教学要綱と新版方便品・自我偈講義の悲惨な内容**は既に散々議論してきたとおりである。そもそもあのように矛盾に満ちた池田先生の講義というのは2010年以前のものでは、私は見たことがない。例えば、日達法主は、池田先生の御義口伝講義を絶賛して、次のような序文を御義口伝講義に宛てて残している。「一度、この講義を読むもの、誰もが感ずるであろう「この講義、一書あれば、他の一切の仏教書はいらぬ」ことを。実にその通りである。私は、本書を一読して、この講義に一言をも加うる余地なきことを知った」(御義口伝講義上, p. 3)

そして、池田先生の講義が完璧でつけ入る隙がないため、日頭は教義的な面から創価学会を攻撃することができず、C作戦というお粗末なものに頼らざるを得なかったといえる。それに比べて2010年以降の池田先生監修を謳う教義書のなんとお粗末なことか。**新版方便品・自我偈講義の自己矛盾は言語道断**である。新版の御義口伝要文講義の内容も、旧版と比較したばあい月とスッポンほどの差があるのは、両者を読んだものならだれでも感じるはずである。

そして、日興門流の根本教義を師匠が最晩年にきて（私はこのような話を信じていないが）破壊し始めたのであれば、それを戒め、出版させないようにするのが執行部の役目ではないか。『池田大作先生監修』という水戸黄門の印籠を振りかざして、あのような邪義を会員に何の説明もなくこっそりと広げようとする行為は言語道断であり、これこそが**牧口・戸田先生と続いてきた根本教義の破壊、即ち師弟分断の破和合僧の行為**であると断じなければならない。そして、『教学研鑽のために 観心本尊抄第2版, 2024』、『創価学会教学部. 現代語訳 観心本尊抄第2版, 2024』、『新版・御書と師弟, 2025』はいずれも池田先生が亡くなられてから出版されたものである。池田先生の御意思に従ってなどと主張するのであれば、次の証拠が求められるのは当然である。

「「いつなのか」「どこなのか」「誰が見たのか」「証人はいるのか」「信頼できる証人、なのか」「証拠はあるのか」「明確な裏付けはあるのか」」（池田大作全集136巻, 広宣流布へ！獅子の道を征け, p. 161）

特に私が注目しているのは、『御書と師弟』旧版2巻, p. 36-37の次の重要な指導—「師匠に打ち込んでいただいた折伏精神を失い、世間に迎合して、広宣流布の和合を破壊するような五老僧の末流とは、断固として戦い抜くのです」—を、新版, p. 247ではごっそりと削除している点である。内部から最も恐ろしい敵がでるといえるのは戸田先生の極めて重要な教えである。

「広宣流布の最後の敵というのは内にこそある。城者の裏切りが城を破るのだ。あの五老僧を見たまえ。五老僧は過去の話ではない」（戸田先生『人間革命』第12巻, p. 319）なぜこの箇所をごっそりと削除する必要があったのか、それを執行部は説明する必要があるであろう。それでは日興上人と五老僧の信仰における違いとはなにか。次の池田先生の講義は極めて重要である。

「日蓮大聖人は宇宙一の偉人である。根本の仏である。その大聖人の仏法を、大聖人に代わって、皆さまは弘めている。最高に尊貴な方々である。誇りを持ち、胸を張って進んでいただきたい」（池田大作全集95巻, スピーチ, p. 403）「日興上人と五老僧の根本的な相違がここにある。すなわち、日興上人は大聖人を悪世末法の衆生の闇を照らす根本の仏として仰がれた」

（池田先生の講義、2008年5月、大白蓮華700号特別寄稿, p. 52）「根源の師」である大聖人に従うのが「信心」なのである。そして、大聖人を御本仏と仰ぎ、厳格に大聖人の教えを守りぬかれたのが、日興上人であられた。

五老僧は「根源の師」の教えを忘れて「よそ」へ心移してしまっただけである。権威、権力を恐れたり、勝手な邪義をもち出したり、世間の誘惑に墮落したりしてしまっただけ」（池田大作全集78巻、スピーチ、p. 413-414）

「日蓮大聖人は、**釈尊を根本の仏として最大に敬い、その教えを正しく拝し**」
創価男子部教室

<https://megalodon.jp/2025-0205-1123-52/https://www.sokayouth-media.jp:443/answer/2826047.html> （魚拓）

「日蓮正宗の教学では、「御本仏」という表現には、日蓮大聖人が根本の仏であり、久遠実成の釈尊も、その仮現（垂迹）であるという含意があるが、創価学会では、「末法という現在において現実に人々を救う教えを説いた仏」という意味で、大聖人を「末法の御本仏」と尊称する」（教学要綱、p. 187）五老僧とは果たしてどのような信心をしていたのか、それはもはや明白ではないか。最後に次の池田先生の重要な指導を引用し、この著書を終わろう。

「戸田先生が厳しく言われた通りである。『敵は外部にあるように見えるが、最も悪質な敵は、内部に出る』。だから、毒を撒き散らす内部の敵とは戦わなければならない。放っておいたら、毒がいつしか充満し、皆の純粋な信仰が破壊されてしまうからだ。ゆえに師敵対の輩とは断固、戦い続けるしかない」（池田先生「大白蓮華」 2008.5 p.56） ーと。

（凶齋の私見）上記、中村誠氏の論稿は、池田先生の本当のご指導が先生のご逝去後に大改竄されている実態を克明に示されています。それはまさに、学会員さんがこれまで池田先生から垂教された日蓮仏法の根本義について、近刊教学書は、削除、改変、改竄し尽くし、日蓮仏法を破壊していると断言します。そして、私は、この事実こそが学会員さんに対する**攪乱そのもの**と断じます。



続いて、最新、2月11日発刊の書「御書根本の大道」を読み文上解釈の作文を2箇所見つけました。一つは、日蓮大聖人を、またもや不軽菩薩止まりにする邪義（188～191頁）、二つ目は、一日興上人は大聖人を「末法の主（しゅ）」として深く尊崇されました（209頁）一です。そして、二つ目は大白蓮華4月号61頁、任用試験教材と同じ記述で完全な邪義なので、以下、破邪顕正します。まず、一つ目の記述は—

不軽菩薩の振る舞い

文上のみの作文

「一代の肝心は法華経、法華経の修行の肝心は不軽品にて候なり」(新1597頁・全1174頁)との御聖訓の通り、法華経常不軽菩薩品第20(以下、不軽品。法華経54頁)には、不軽菩薩の振る舞いを通して、妙法の実践のあり方が次のように示されています。

— 正法が見失われつつあった、威音王仏の像法時代の末に、不軽という菩薩がいた。彼は出会う全ての人を礼拝し、賛嘆して語りかけた。

「私は深くあなたたちを尊敬し、決して軽んじません。なぜなら、あなたたちはみな、菩薩の修行を実践したならば、成仏することができますはずだからです」と。(釋文では24字の漢字で表されることから「二十四文字の法華経」といわれる)

不軽は、増上慢の人々から悪口されたり、杖(棒)や石で打たれたりする迫害を受けたが、礼拝行を貫いたことで種々の功德を得て、広く人々のために法華経を説いた。その姿を見て、不軽を軽んじていた人々も、最後はその教えを受けて救われていった。

釈尊はこう説いた後に、不軽菩薩が自身の過去の姿であることを明かしました。全ての人に仏性があり、仏界があります。不軽菩薩は、出会う一人一人を未来の仏として平等に尊敬したのです。

大聖人と不軽菩薩の共通性(だいの内容でダメ)

日蓮大聖人は、竜の口の法難以降、この不軽菩薩の生き方を、末法の法華経の行者である御自身と重ね合わせられました。そこには、「迫害」というテーマに貫かれた大聖人と不軽菩薩の共通性が押されます。

竜の口の法難の後

流罪地の佐渡に向かう道中、大聖人は「過去の不軽品は

今の勸持品、今の勸持品は過去の不軽品なり。今の勸持品は未来は不軽品たるべし。その時は、日蓮は即ち不軽菩薩たるべし」(新1280頁・全953頁)としたためられました。

「過去の不軽品」とは、不軽品に説かれる不軽菩薩の実践のことです。「今の勸持品」とは、末法の今における大聖人の闘争を指します。大聖人は命に及ぶ大難を幾度も受けられ、(この時)には伊豆流罪に次ぐ2度目の流罪に処されました。まさしく法華経勸持品第13に、法華経の行者に必ず競い起こると説かれる「三類の強敵」と、敢然と戦われるお姿でした。

すなわち大聖人は、過去に不軽菩薩が行った不惜身命の闘争を、末法の今、日蓮が実践しているのだ。と宣言されているのです。そして、未来には、日蓮は不軽菩薩のように人々を救って成仏するであろう。との大確信を述べられています。

大聖人と不軽菩薩との間には、主に四つの観点から共通性が認められます。

1 点目に、「不軽菩薩の二十四字の法華経と日蓮の妙法蓮華経の五字とは、その言葉は違っていますが、その意味は同じである」(新609頁・全507頁)と通解と説かれるように、自他の仏性をたえ引き出す万人成仏の法を弘通したという点で、弘めた「教」が共通します。

2 点目に、「不軽の出現した像法時代の末と今の末法の初めとは、全く同じである」(同、通解)と仰せの通り、どちらも悪世であり、迫害を受けながら弘通する時代であることから、弘通の「時」が共通します。

3 点目に、「かの不軽菩薩は初随喜(法を聞いて歡喜の心を起こす初隨喜の位)の人であり、日蓮は名字即(初めて仏の教えを聞いて仏弟子となった段階)の凡夫で、(修行の位は最初であり共に)等しいのである」(同、通解)とあるように、大聖人も不軽菩薩も、どちらも壮麗で超人的な仏などではなく、自他の成仏を目指す菩薩として妙法の実践を始めた凡夫であり、修行の「位」が共通します。

文上だけの、一往と再往が記さぬ

「御書根本の大道」は、竜の口法難での発迹頭本の本義(久遠元初自受用身の開頭)を記さず大聖人を文上だけからの菩薩としか記さず、日蓮大聖人の本因の妙法を記さない邪義である!

上記に掲載の「御書根本の大道」の記述は、一大聖人と不軽菩薩の共通性と題して、大聖人様と不軽菩薩のお立場を明確にせず、対等の如き不正の記述なのです！以下、池田先生のご指導、**一大聖人の本因の妙法**、また、**大聖人の仏法においては（略）御本尊の受持により直達正観が可能なのであります。**一を無視した文上だけの、邪義なのです！上記邪義への反証として、池田先生の「百六箇抄」講義には一

「百六箇抄」の現文では、大聖人の妙法弘通の文と不軽の修行を示す文のあいだに「手本には」と記されております。すなわち**大聖人の本因の妙法を弘通するにあたって、不軽の修行を「手本」**にすべきであるとの仰せと拝せる。

「手本には」とは、そこから学ぶべきであるとの意味であります。**不軽の言動をそのまま末法の実践として取り入れるということではありません。ちなみに不軽菩薩は、迹仏である釈尊の過去因位の修行の姿にすぎません。**故に、不軽が事実のうえに妙法の当体をあらわすことができず、ただ理として衆生に内在する仏性を礼拝せざるをえなかったことは、今述べたとおりであります。

日蓮大聖人とは仏としての力も資格も全く違っております。それにもかかわらず、不軽の修行から何を学び取れと仰せなのでしょう。それは一言にしていえば、不軽菩薩が、種々の迫害にもかかわらず、上慢の衆生の生命に内在する仏性、妙法蓮華經に直接的に肉薄しようとした事実であります。常不軽という名前自体が、一切の衆生の生命は三世常住の妙法の珠を包んだ尊極なる当体であり、決して軽んずべきではないという内容をはらんでおります。

不軽菩薩は、その名前のとおり、但行礼拝をなしつつ人々の生命に内在する仏性に肉薄し、相手の心を奥底から揺さぶり続けたのであります。たとえ仏法を求めない衆生の心底の元品の無明を激発させることがあっても、またそれ故に迫害を被ることがあっても、衆生の仏性を開発し、妙法による生命変革を成し遂げさせずにはおかないという不退の決意が、不軽菩薩の実践に脈々と流れていたと思うのです。まさしく折伏という仏法弘通の方軌にほかなりません。

日蓮大聖人の本因の妙法を弘通する方軌も、勸持品に説かれるように、折伏の行相を根本としております。ここに日蓮大聖人と不軽の姿は全く一致するのであります。故に「手本には」とは、本因の妙法の弘通において衆生の仏性そのものに直接的に肉薄し、その生命を根底から揺さぶった不軽菩薩の修行の在り方に学ぶべきであるとの意味と拝せましょう。いうまでもなく**大聖人の仏法においては、事の一念三千の直体である御本尊の受持により、我が生命の内奥から妙法の血潮を顕現させることができます。また誰人であれ、御本尊の受持により直達正観が可能なのであります。**一と。 27/37

(私見) 上記で、池田先生は大聖人様と不軽菩薩の立場、使命を明確に区別されています。そして、さらに反証として「御書の世界」(下)には—

森中 この不軽菩薩は、教主・釈尊の菩薩の時の姿であると法華經に説かれています。不軽菩薩は、但行礼拝の折伏行で、反発・敵対する人まで、あらゆる人を救っていった。その功德で、自身も妙法を悟り、成仏しています。

池田 法華經本門で久遠実成を明かした後、釈尊自身の過去世の修行が説かれるのは、唯一、不軽品だけです。そのことから考えると、久遠の釈尊の成仏の本因も、不軽の実践にあったと拝することができるのではないだろうか。

「御義口伝」では、不軽菩薩の礼拝行について、寿量品の「我本行菩薩道」の文に言及し、「我とは本因妙の時を指すなり、本行菩薩道の文は不軽菩薩なり此れを礼拝の住処と指すなり」と仰せです。つまり、**久遠において成仏の本因を修行する釈尊とは、不軽菩薩に他ならない**との仰せと拝することができます。

斎藤「我本行菩薩道」は、久遠の釈尊が成仏した本因を明かした本因妙の文です。この文底に、成仏の本因の法である南無妙法蓮華經が秘されており、大聖人はそれを万人に説き示し、三大秘法の御本尊として、あらゆる人に成仏の道を開かれました。

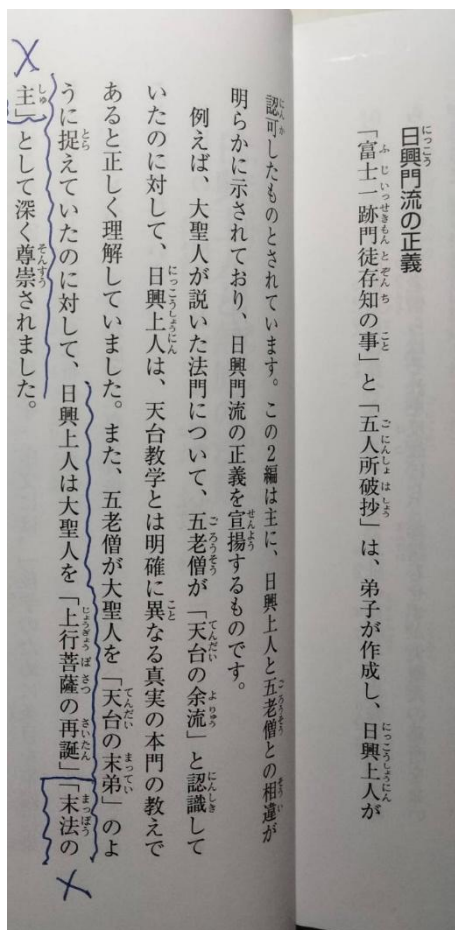
池田 久遠の釈尊は、万人の生命に具わる三世永遠の妙法を覚知し、修行して成仏したのです。“誰もが妙法を欠けるところなく具えた尊い存在である”との真実への目覚めによって、自身を仏界という最高の境涯へ高めていくことができたのです。また、「御義口伝」では、不軽の礼拝行は寿量品の「每自作是念」の文にあたることも仰せです。

森中 仏が毎に一切衆生の成仏を念じ、願っていることが示されている文ですね。

池田 仏は成仏する前も成仏した後も、常に万人の成仏を願い続けるのです。それが、あらゆる生命の奥底にある永遠の願いだからです。**不軽菩薩の一念は、この仏の心と同じだということと拝することができます。**これらの仰せから、不軽菩薩の実践すなわち折伏とは、自他の成仏の直道であり、自他どもの幸福を開く崇高な実践であることがわかります。一と。

(私見) 上記、池田先生のご指導より、**不軽菩薩はあくまで「手本」であり、久遠において成仏の本因を修行する釈尊とは、不軽菩薩、また、一日蓮大聖人とは仏としての力も資格も全く違っております。**—なのです。ゆえに、「御書根本の大道」の記述は、文上だけの邪義なのです。

二つ目は、大白蓮華4月号の61頁、任用試験教材「教学入門」と同じく、日興上人は大聖人を末法の教主とされた、との文上だけの邪義です。これについては、4月28日の拙文 <https://share.google/GDOcjCy25oTd57PTY> の60頁で、池田先生の本当のご指導である「百六箇抄」講義を引用して破邪顕正しました。以下再度、掲載します。一講義の冒頭には一



文底深秘の法門を明かした相伝書 「百六箇抄」は、末法の御本仏・日蓮大聖人より、第二祖・日興上人に口伝された相伝書であり、正宗においては「本因妙抄」と併せて、両巻抄とも血脈抄とも呼びならわされてきた重書中の重書であります。一と記され、本文には一（小題）大聖人こそ久遠元初の仏—「久遠名字より已来た本国本果の主・本地自受用報身の垂護上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮詮要」この文は文底の意にのっとりた解明であります。

「久遠」とは久遠元初であり、「名字」とは名字凡夫の位を指します。「本因本果の主」とあるのは、本有常住の十界（九界と仏界）の因果を俱時にそなえた仏、という意味であります。

故に「久遠名字より已来た本因本果の主」の文は、久遠元初において、名字凡夫位のままで、我が身は即妙法の当休であると開悟され、即時に、究極の仏果を得られてより以来、すなわち無始無終にわたって常住する本国本果の主である、と拝せるのであります。これ日蓮大聖人の久遠元初における成道であり、久遠元初の自受用報身即日蓮大聖人の生命が永遠の過去から無限の未来にわたって本因本果の主として常住されていることをあらわした御文であります。一と。

また、（小題）久遠実成直体の本迹 久遠元初の自受用身には一
わが身即妙法の当体の覚悟が大事 日蓮大聖人は久遠元初において、名字童形のわが身を、即、久遠名字の正法の直体であると覚知され、即座に妙覚果満の仏の大生命を体現されたものであります。総勘文抄には「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」と記されております。 29/37

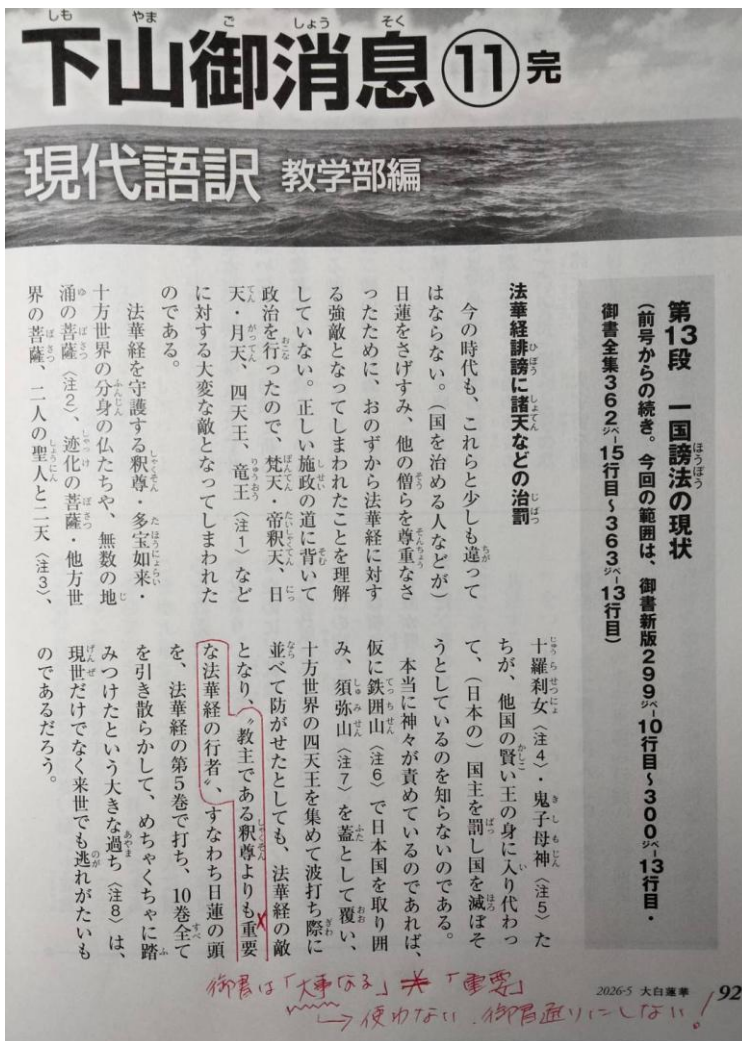
この場合釈迦如来とは名字凡夫位の釈迦、つまり久遠元初の自受用身如来であります。「我が身は地水火風空なり」とはわが身即全宇宙であり妙法蓮華經の当体であるとの意味です。境智の二法からすれば、「我が身」等が境となる。その境を覚知する「知」が智となる。この境智が冥合するところに、凡夫の当体のまま、即座開悟の無作三身如来の大生命が顕現するのであります。このような観点から久遠名字の正法と名字凡夫位の釈迦を本迹に立て分ければ、外用の面である凡夫童形の釈迦が迹となり、その内証に脈うつ久遠の妙法蓮華經が本となるのであります。

さて御文には「名字童形の位、釈迦は迹なり」にひきつづいて「我本行菩薩道是なり」と記されております。この御文は、いうまでもなく南無妙法蓮華經如来の寿量品における「我本行菩薩道」とは、久遠元初の自受用身即無作三身如来の外用の面の振る舞いであり、行動であり示同凡夫のお姿であります。故に「迹」となるのであります。凡夫の振る舞いの中に真実の仏法 末法に出現された久遠の本仏、日蓮大聖人は、妙法を広める立場では上行菩薩の再誕というお姿をとられました。これ、日蓮大聖人の「我本行菩薩道」であると拝されるのであります。しかし、大聖人の本地は、あくまで久遠元初の南無

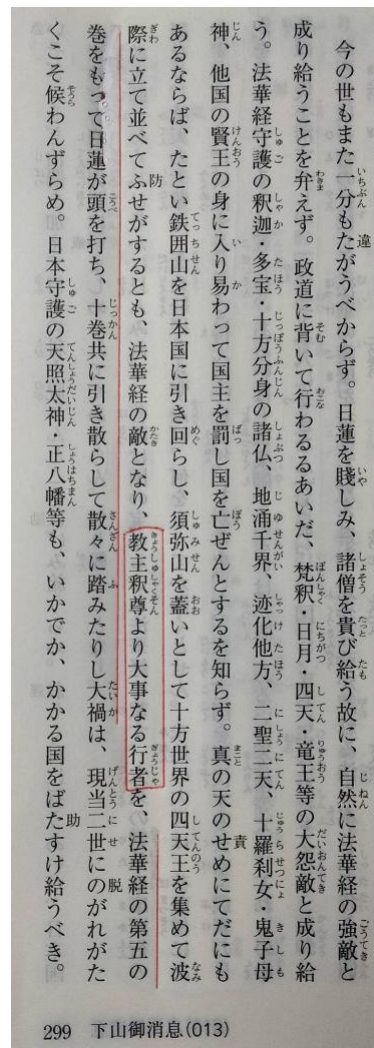
妙法蓮華經如来であられます。一と。

(私見) 上記、池田先生のご指導より、日蓮大聖人御自身が日興上人に奥義を垂教され、それを池田先生がご教示なのです。即ち、日興上人は大聖人を久遠元初の自受用身如来と拝し、決して、末法限定の御本仏とだけの認識はされていないのです。ゆえに、上記「御書根本の大道」及び、大白蓮華の記述は邪義なのです。これはまさに「教学要綱」の底意である釈迦本仏論に追従した邪義であると断言します。これこそ日蓮大聖人への違背、三代会長への不知恩なのです。

さらに続いて、大白蓮華5月号92頁に掲載の下山御消息⑩完現代語訳での記述—教主である釈尊よりも重要な法華經の行者、すなわち日蓮—の現代語訳の不正につき、この場で、きちんと破邪顕正します。御書の本文—教主釈尊より大事なる行者—を、何で、こんな現代語訳にするのか！これでは、御書の本文を改竄した内容と言われても仕方ない！酷い表現である！皆様、以下、ご高見下さい。



大白蓮華 5月号 92頁 右：御書



日蓮大聖人は、「教主釈尊より**大事なる行者**」と記されているのに、なぜ、大白蓮華は、大聖人の御言葉を無視して「**重要な法華経の行者**」と変えるのか！それも、一法華経の一をあえて冠して、大聖人様を釈迦の説いた法華経の行者へと、敢えて文上解釈の現代語訳になっている。これは池田先生の文底からの本当のご指導とは全く違背した邪義、結論、**釈迦ファースト**、**釈迦本仏論**である！

池田先生はこの下山御消息の講義で、結論、日蓮大聖人の**本地は久遠元初自受用報身如来**であられる。一と明確にご指導なのです。以下、昨年11月18日の拙文 <https://share.google/DcQaf0Yo9GmOx50A5> に記した反証を、再掲示します。ご高見下さい。



池田大作監修「下山御消息に学ぶ①」(平成3年、1991年刊)の143, 144頁 第二章 本抄の教学的位置には— 御図顕された御本尊の相貌によって大聖人の御真意は明瞭であるといわねばならない。すなわち、本門の 釈尊を脇士となす本尊こそ、地涌千界の上首・上行菩薩の再誕として末法に出現された大聖人の顕される一閻浮提第一未曾有の御本尊にほかならない。しかしながら、上行菩薩の再誕としての御立場は迹で、その本地は久遠元初自受用報身如来であられる。人に約して久遠元初自受用報身如来とは即法に約して南無妙法蓮華経であり 御本尊中央の首題であられる。釈迦・多宝はその左右にあつて脇士となっているのである。その意味で、下山抄における「教主釈尊より大事なる行者」とは、まさに大聖人の御内証の御立場を示されたものであり、教主釈尊とは久遠元初の御本仏に対して脇士となる本門の教主釈尊を指している。—と。

そして、須田晴夫氏の「日蓮の思想」383頁には、以下記されています。—本抄では日蓮自身の位置づけが示されている。それは次の文である。「たとい鉄圍山を日本国に引き回し、須弥山を蓋として十方世界の四天王を集め波際に立て並べてふせがするとも、法華経の敵となり教主釈尊より大事なる行者を法華経の第五の巻をもって日蓮が頭を打ち、十巻共に引き散らして散々に踏みたりし大禍は、現当二世にのがれがたくこそ候わんずらめ」(三六二頁) ここで自身について「教主釈尊より大事なる行者」と規定していることが重要である。なぜ、日蓮が「釈尊より大事」なのか。それは釈尊は末法における教主ではなく、日蓮こそが末法に南無妙法蓮華経を弘通する教主であるからである。すなわちこの文は「日蓮本仏」を裏づけるものとして解せられる—と。

さらに、本稿1頁で紹介の中村誠氏の新刊には、以下、池田先生のご指導を引用して、「教主釈尊より大事なる行者」の本義を論証されています。

—大崎ルールの基礎を築いた浅井要麟氏を池田先生が痛烈に批判されていることをもう一度思い出してほしい。次に引用しよう。「次に浅井要麟氏の見解について触れておこう。同氏は、「教主釈尊より大事なる行者を法華経の第五の巻を以て日蓮が頭を打ち」の個所について「末法には教主釈尊よりも大事な法華経の行者日蓮が頭を、法華経の第五の巻を以て打ち」(日蓮聖人御遺文講義十巻二八四頁)と訳し、「末法には」との一句をつけることによって、釈尊が現存しないが故に法華経の行者である日蓮が末法の今は最も大事な人であると解している。

これは、原典にはない言葉を付け加えることによってその真意を歪めたものといわざるを得ない。同氏は、「下山御消息の如きは、夙にその真蹟が散逸して、後人がこれを補筆した形跡もある」(日蓮聖人教学の研究三六九頁)と述べ、該当部分も後世の歪曲があった可能性があると言っている。しかし、該当個所に竄入の余地のなかったことは前章でふれた。(下山御消息に学ぶ1巻, p. 104) **氏の現代語訳は原文を歪めた極めて悪質なものである**と評価せざるを得ない。この現代語訳には、原文にない「末法には」と「法華経の」という二語が挿入されており、結果として読者に次のような誤読を引き起こさせるようになっているのである。「末法には」と付け加えることで末法限定に大聖人を貶め(この浅井氏と同じ文章操作は新版方便品・自我偈講義でも使用されている)、末法を超越した根本仏の存在があるようにみせかけている。又、「法華経」という言葉を付け加えることで、「末法において教主釈尊よりも大事な法華経」その「法華経」を修行する行者という全く違う御文の解釈が可能のように仕向けているのである。**このような改変はアカデミックの世界基準では決して許されるものではなく、改竄 (falsification)とみなされても仕方がない**であろう。そして、自らこのような原文の改変を行っておきながら、一方ではこの御文を竄入などとみなすのは、学者に求められる「先人たちの言葉やデータを歪めず、都合よく解釈もしない誠実さ」からかけ離れている。

ところがである。このような原文改変を行った人物が中心となって作り上げられた大崎ルールは、理想的には大聖人の真蹟がある御書のみを使用して議論し、第二段階として大聖人の直弟子の古写本使用を許すという厳格なルールを用いているのである。この二面性は何を意味するのであろうか。**池田先生はこのような態度を次のように厳しく批判されていた。「邪宗身延派日蓮宗等が、自らの宗派の非をかくすため、三大秘法抄を偽書扱いにしたり、あるいは、御義口伝、本因妙抄、百六箇抄を偽書扱いにした」(御義口伝講義上, p. 800)** ようするに、大崎ルールとは表面上は学問的厳格性を装いつつ、その真の目的は、日蓮を本仏とする思想を持つ御書群を全て排除することとみなされても仕方がないであろう。仮に大聖人の真蹟のみを基準とするのであれば、身延派等の釈迦を根本仏とする連中にとって最も不都合な御義口伝等を排除できるので、極めて好都合であると考えられる。そして、このルールに従って文書を構築しているのが教学要綱なのである—と。

そして、**中村誠**氏から以下、鋭い論考を頂きました。

—「教主である釈尊よりも重要な法華経の行者」という現代語訳ですが、ここで問題なのは、「大事」を「重要」と書き換えており、さらに「法華経の」という原本にはない語句を勝手に付け足していることです。 33/37

この操作でどうなるかという「大事」という人よりの語彙を「重要」という物よりの語彙に置き換えることで、「釈尊よりも重要な法華経（法勝人劣）、そしてそれを修行した行者・日蓮」、という**全く違う解釈ができてしまう**ことです。この操作は極めて悪質で、巧みに日蓮勝・釈尊劣という解釈とは別の解釈ができるようにしています—と。

（私見：凶齋）上記、**中村誠**氏の論考はまさに正論です。池田先生が下山御消息における**日蓮本仏論**を明確にご指導されたことを、大崎ルールの誤りを通して論証、さらには、「**教学要綱**」の邪義の本質まで論証された**玉稿**と拝します。

以上で、近刊の教学書2冊と大白蓮華がどれほど池田先生の本当のご指導とは全く齟齬、違背しているかを、親友の**中村誠**氏の玉稿、また、私の拙文により記し置きました。

*

最後に所感です。私は今月71歳になり、10月に入信71年となります。これまでの人生の基盤には常に創価学会がありました。学会は人間革命と宿命転換への道場でありオアシスです。これまでご縁して頂いた何百、何千の学会員さんへは感謝、尊敬、敬愛しかありません。そして今、私は僭越ながら、**日蓮仏法の真義と池田先生の本当のご指導**を厳護するべく、池田門下生の使命と責務を胸に破邪顕正の言論をしております。

私は、創価学会の組織は、会員が日蓮大聖人様の教義を研鑽し合い、自らの信心を更に深化、自身の間人革命、境涯革命を通して、社会に日蓮仏法の正義と真義を弘めることこそが会の一番の目的であると確信しております。そして私は、その通り自身の教学の質問を幹部に致しました。しかし、幹部の誰一人として私の教学への疑問に返信されず、最終的には抗弁の機会もなく役職を解任され、果ては地域組織から交信を遮断されました。こんなことが現代の社会であってよいのでしょうか！それも、人間の生命を最大に尊重する宗教団体としての理念、理想とのギャップはどのように考えたらよいのでしょうか？

私がどなたか個人を攪乱させたのでしょうか？非難されたような組織の攪乱とは具体的にどのようなことか、全く示されていません。これでは、教学の質問さえ許されない創価学会との悪しき前例になってしまいます。私は、これはおかしいとの判断からも、この拙文を記しました。学会創立100年を目前にして、是非とも私のように排斥される会員がないように、健全なる学会組織を願うばかりです。

19年前の2007年5月8日、池田先生は埼玉池田研修道場で一破邪顕正が仏法の魂一とご指導されました。私は、この池田先生の獅子吼を心肝に染めております。そして私は、池田先生の本当のご指導に違背する「教学要綱」に対して、**一間違いは断じて破邪顕正しなさい**との御本尊様からのご下命を頂いております。ゆえに私は、邪義「教学要綱」の絶版をさらに訴えて参ります。

なお、以下、私の記した自活サイト掲載の拙文です。「教学要綱」の邪義について26の論文を記しました。ご高見下さい。

(アテンション7編)

2025. 1. 16 池田先生の「法華経 方便品・寿量品講義」の「改ざん」の実態が一目瞭然！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト

ト <https://share.google/uO8aTHHsn1UqloGgI>

2025. 2. 20 教義改竄の実態を具体的に解説 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/rUvbUCzMZRZbgMZN9>

2025. 4. 15 戸田先生のご指導とも大違背の「新版 法華経方便品・自我偈講義」の邪説 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト

<https://share.google/QyfOUjtjPR4M56JeM>

2025. 5. 7 凶斎氏が追撃弾！全く反論不能の現創価学会 -

JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/4nbtX3NTNkpJrbssF>

2025. 8. 24 池田先生入信記念日に、破邪顕正の論考発表！ -

JIKATSU | 創価自主活動支援サイト

ト <https://share.google/YDDWNXEzTifXcgm5W>

2025. 9. 12 凶斎氏が「教学要綱の不正」の続編を発表！ -

JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/pX63bWIXdPfnXGJUI>

2025. 11. 18 創立95周年を期して、凶斎氏が悪書「教学要綱」に更なる鉄槌の論考発表！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト

<https://share.google/DcQaf0Yo9GmOx5OA5>

(宗学コラム 19編)

2025. 9. 29 「現代誤訳 四信五品抄 本尊問答抄」を読んで -

JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/rxk8T0hxyy552wGO9>

2025. 11. 28 魂の独立記念日に思う - 「教学要綱」の不正 -

JIKATSU | 創価自主活動支援サイト

ト <https://share.google/HhDdCFoFWcSVkEpyV>

2025. 12. 8 創立 95 周年、年末に思う－「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/ngk4Ij0YIJN72ltCL>

2025. 12. 13 釈尊を「永遠の仏」とする聖教新聞の邪義！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/3bnY4oR23fnDlsOWn>

2025. 12. 18 (続) 釈尊を「永遠の仏」とする聖教新聞の邪義！ - AI が聖教新聞の不可解で詐欺的な文献引用姿勢を解説！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/gst62rydMRpYdfxLk>

2026. 1. 2 池田先生のご生誕日に思う-「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/7Mw8y9QBF7JYNknVw> 35/37

2026. 1. 3 (続) 池田先生のご生誕日に思う-「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/cjLL8sideWXGxQtdva>

2026. 1. 10 (更なる続き)池田先生のご生誕日に思う－「教学要綱」の不正 池田先生の著作指導の AI 検索化への疑問 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/qMXKT1RxcValTz3rS>

2026. 1. 18 「御義口伝講義」を改竄の「我らは地涌の菩薩なり」を糺す - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/I0L0rreurRQPmPSQE>

2026. 2. 11 戸田先生のご生誕日に思う－「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/CdecUV1NhwTWEihyZ>

2026. 2. 11 戸田・池田両先生のご指導に違背した大白蓮華 1 月号を糺す - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/PtMsZ4fNQNzbcYj8r>

2026. 2. 16 日蓮大聖人のご生誕日に思う-近刊「法華経入門」の不正 池田先生が「法華経の智慧」でご指導された日蓮仏法の真義を無視する不知恩の書 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/deY6hFeRD9rDYmoKs>

2026. 2. 26 (続) 日蓮大聖人のご生誕日に思う-近刊「法華経入門」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/RHxWjzbGsiRq7CSwp>

2026. 2. 28 「開目抄」ご執筆の二月に思う新刊-「御書根本」の大道-の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト

<https://share.google/vwHKdmkzPDHsMWKOz>

2026. 3. 16 3.16 に思う－新刊「御書と師弟」の不正 - JIKATSU 創価自主活動支援サイト <https://share.google/EP88GIsjWEMdbOTPG> 36/37

2026. 3. 20 「寿量の仏」を釈尊と回答する「SOKA D.I. SEARCH」の不正 御本尊様の相貌について大謗法の検索は即刻、廃止すべきである - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/lcZcm0F3ELamfWU0Z>

2026. 3. 29 「教学要綱」の不正記述13、及び、無視、削除された日蓮仏法の本義 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/bW93pyQ684XYcNsFA>

2026. 4. 2 (追記版) 「教学要綱」の不正記述13、及び、無視、削除された日蓮仏法の本義2つ他 戸田城聖先生のご命日に、邪義-「寿量の仏」は釈尊-を糺す - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/OSyp1HG6fUZVuTu2p>

2026. 4. 28 立宗宣言の日に糺す-「教学要綱」の重大な不正・邪義17他 池田先生のご指導「文底が説かれて仏法は完結」を無視した邪義「教学要綱」を、破邪顕正する！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ

ト <https://share.google/GDOcjCy25oTd57PTY>

この拙文を親しき友人にお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご意見、ご指導を、kiiroibara.526@gmail.com にお問い合わせ申し上げます。 敬具 図齊修